|  |
| --- |
| 　全日中「北海道大会」第８分科会「条件整備」 |

①研究題

学校と地域の連携・協働による「チーム学校」の実現

②テーマ

「～地域の特色を強みに変える「チーム学校」の取組を通して～」

③発表者

北海道壮瞥町立壮瞥中学校長　松岡　賢晃

１　はじめに

　令和３年の「令和の日本型学校教育の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現（答申）」では、「学校内、あるいは学校外との関係で、『連携と分担』による学校マネジメントを実現することが重要である。」と示されている。さらに「地域全体で子供たちの成長を支えていく環境を整えていく必要がある。」とされている。

２　実践の概要

　地域の特性を生かした「チーム学校」の取組として、「地域との連携・協働を図る学校運営協議会の取組」と「多様な地域住民や専門家の支援を得ながら実施した防災教育の取組」、そして「学びをつなぎ、指導をそろえ、主体的にかかわるそうべつ型小中一貫教育の取組」を進めてきた。

（１）壮瞥町学校運営協議会を活用した取組

　学校運営の質を高める学校運営協議会と教育活動の幅を広げ支える地域学校協働本部が両輪となり、学校運営協議会で議論された内容が、地域学校協働本部の支援を受け、地域と学校が連携・協働して教育活動を展開するという流れが構築されている。

（２）地域の特色を生かした人材活用の取組

　壮瞥町では「ふるさと教育」に力を入れており、その一つに有珠山噴火を想定した防災教育を行っている。学校単独の取組ではなく、町の防災係や警察、消防、専門家と連携して実施している。

（３）そうべつ型小中一貫教育による取組

　令和３年から小中一貫教育の取組を行ってきた。「学びをつなぐ」「指導をそろえる」「主体的にかかわる」という３つのキーワードにより９年間を見通した連続性や特性のある学びを実現するための全体計画を策定した。

３　成果と課題

・取組に対する検証、改善策に当事者意識をもった意見が得られるようになった。

・地域とともにある学校への意識付けにつながった。

・小・中学校の教職員が校種を超えて教育活動を展開することができた。

・打ち合わせの時間が十分に確保できなかったことにより連携が図れない場面があった。

・実際に指導に当たる教員同士の連携をさらに深める必要がある。

４　研究協議

・人選等や立ち上げに至るまでの過程等学校運営協議会の在り方について地域や規模によって課題が異なる。

・小中一貫教育についても施設の距離や教委の姿勢等によって差がある。

５　指導講評

・平成２７年の中央教育審議会の答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」に沿った実践であった。

・コミュニティースクールの設置率はまだ全国的に約半数である。設置してあるところでも課題があるが、解決の糸口の一つとして参加者の方にも校長の方針に基づいて当事者意識を持ってもらうことである。

報告者：岩崎　隆（飯能・飯能第一中）